

白朗の初期作品について

——出て行く若者たち——

平 石 淑 子

東北作家の一人に数えられる女性作家白朗（1912～94）は、金劍嘯（1910～36）¹⁾らと共に満洲国建設後の中国東北における抗日文芸活動の一端を担った人物である。

彼女の作品は『白朗文集』²⁾でまとめて読むことができるが、ここに収録されたもの以外にも、雑誌や新聞の副刊などに掲載された作品があるようである。またどのような経緯かわからないが、1950年に書かれた「為了幸福的明天」の日本語訳が、「幸福な明日のために」（鮑秀蘭訳）として1952年8月に沈陽の民主新聞社より出版されている。

解放後は婦女活動に従事し、中国代表として何度も海外の大会に参加したが、反右派闘争に継ぐ文化大革命の嵐の中で心を病み、筆を折るに至った。筆者の知る限り白朗の読者は多くない。しかし1930年代の東北で担った白朗の役割の重要性を思えば、彼女にはもっと関心が向けられてよい。同時期に活躍した東北の女性作家、蕭紅（1911～42）³⁾の生涯があまりに鮮烈であったために、白朗の作品と生涯は、その陰に隠れてしまったかのように見えるが、自立した近代女性の先駆けとして、注目されるべき人物の一人であり、また1950年代後半から文化大革命期にかけ、蕭紅とは違って政治的に生きた彼女であればこそその苦悩について、我々はやはり知らなければならないと思う。本小論では、白朗を知る道筋の第一歩として、彼女の哈爾濱時代の作品と活動について考察する。

一

白朗、本名劉東蘭は、1912年8月、沈陽に生まれている⁴⁾。1911年6月生まれの蕭紅よりおよそ一歳年下である。1922年、小学校卒業の年に医者だった父親が死に、母親と共に父方の祖父の元に身を寄せる。祖父劉紫揚は沈陽でも有名な漢方医で、白朗らを連れて齊齊哈爾に移ってからは、モンゴル王の病を治療したことで重用され、黒龍江省督軍呉俊昇の軍医所所長を務めた。陳震文によれば、祖父は厳格な封建思想の薫陶を受けた人で、孫に対しても厳しく接し、近所の子供たちと自由に往き来すること、教科書以外の本を読むことを禁じたという。だが、祖父は著名ではあったが軍人でも官僚でもなく、権力も財産も求めることをしなかったため、張作霖と呉俊昇が殺された後は職を失い、生活は困窮し、彼が死んだ時は棺桶も買えないほどだったらしい。白朗の母親は善良な家庭婦人で、自分たちの生活が苦しいにもかかわらず、より貧しい人々への思いやりを忘れなかった。白朗には姉のほかにも弟がいたが、共に胸を病み、貧しさのために十分な治療を受けられず、早逝したと言う。こういった一連の不幸のために白朗の母親は精神を病むに至った。

祖父の死後、白朗は齊齊哈爾で、従兄の羅烽（1909～91）一家と同じ屋敷に住むことになり、1929年秋、哈爾濱で羅烽と結婚する。黒龍江省立女子師範学校を卒業して間もなくのことである⁵⁾。羅烽はもともと、白朗の母親が長女の婚約者にと決めていた人物だったが、長女が早くに死んだため、次

女の白朗を嫁がせたのである。この結婚は白朗本人の意志とは関わないものだったが、羅烽とはその後死ぬまで、同志として互いに信頼し合い、助け合っていくことになる。

羅烽は本名を傅乃琦といい、1909年12月13日に沈陽で生まれている。祖籍は山東省蓬萊県で、獣医をしていた祖父が一家を連れて東北に移り住み、馬市を経営して生計を立てていたという。生活は比較的豊かだったが、祖母の死後に再婚した女性に阿片の悪習があり、祖父の死後は彼女が財産のすべてを独り占めしてしまった。このため、羅烽の父親は苦勞して一家を支えたが、一人息子の羅烽の教育には熱心だったらしい。1922年、高等小学校卒業後、祖母の姉妹の連れ合い（白朗の祖父）の紹介で、父親が呉俊昇の軍医所の文書係となったため、齊齊哈爾に移る。1923年、黒龍江省立第一中学校に入学するが、経済的理由によって退学、白朗の祖父の紹介で訥河県長の秘書となるが、役人たちの墮落した生活と貧しい人々に対する苛酷な仕打ちに嫌気がさし、一ヶ月もたたないうちにそこを辞めてしまう。その後は父親に出資してもらい、友人と本屋を経営しようとするが失敗する。しかしこの間に多くの書物を読みあさったことは、その後の羅烽の思想形成の基盤となったようである。1928年、哈爾濱の呼海鐵路伝習所に入学。同期の胡起が主催する読書会に参加するようになり、翌年、同じく同期の徐乃健と共に、胡起の家で、満洲省委姚禿子の立ち会いのもと、簡単な入党式が行われる。姚はその場で呼海鐵路特別支部の成立を宣言、胡起を支部書記、徐乃健を組織幹事、羅烽を宣伝幹事に任命した。羅烽が白朗と結婚したのは、入党の直後である。1931年2月、羅烽は胡起に代わって呼海鐵路特別支部書記となり、秋には呼海鐵路全線の7つの支部の巡視員に任命される。柳条湖事件が起こったのはこの頃である⁶⁾。

柳条湖事件の直後、羅烽が黨員として活動していることを白朗が知り、その後彼の忠実な同志として活動を支えていくようになる経緯は、白朗「淪陥前後」(1935年)に詳しい。二人の家で第一回反日会議が開催され、当時哈爾濱市委書記であった楊靖宇(1905～40)⁷⁾が訪れたのがこの年の10月1日、年末、白朗は反日大同盟に加入する。翌年1月、楊靖宇の下で、羅烽は哈爾濱傅家甸地区(東区)宣伝委員となり、同じく西区宣伝委員に任命された金劍嘯と共に、左翼文芸活動を展開していく。1932年の初め、自宅で宣伝のビラや標語を印刷した時、昼間は白朗に加えて羅烽の父親もそれを手伝ったらしい⁸⁾。

ちょうどこの頃、羅烽や白朗、金劍嘯らと共に哈爾濱の抗日文芸活動を担うことになる青年たちが続々と哈爾濱に集まって来る。1931年冬、義勇軍立ち上げに失敗した蕭軍(1907～88)⁹⁾が哈爾濱に来て、馬占海の率いる抗日部隊との連絡及び宣伝活動を行っている。舒群(1913～89)¹⁰⁾も同じ頃義勇軍に入るが、その統制の取れていないことに幻滅し、学生時代の友人陳士清の紹介で、1932年3月、コミンテルンに加入し、情報員になる。彼の入党は同年9月である。〈国際協報〉副刊における文芸活動などを通じて顔見知りとなった彼らのもとに、旅館に軟禁された蕭紅から救済を求める手紙が届くのが1932年6月のこと、折からの松花江の氾濫に乗じて蕭紅を救済した彼らは、金劍嘯を中心として様々な活動を展開していく。1932年11月20日には、水害被災者救済をうたって威納斯画展を開き、その後星星劇団を結成¹¹⁾、折から哈爾濱〈国際協報〉社が女性記者を募集しており、党の指示を受けた白朗が試験を受けて合格(1933年4月)、同年8月、蕭軍の沈陽時代の友人陳華を通じ、長春〈大同報〉に文芸副刊〈夜哨〉(8月6日～12月24日)を創刊する。陳震文によれば、口下手で人と接することが苦手だった白朗は、記者として人前に入る仕事が性に合わず、退職しようと考えていたちょうどその時、〈国際協報〉副刊を編集していた方未艾(1906～2003)¹²⁾がソ連に学習に行くことになり、その後を白朗が引き継いで、副刊〈婦女〉、〈国際公園〉などを担当するこ

とになった(1933年10月)。そして1934年4月、地下党の支持を受け、〈国際協報〉に文芸副刊〈文芸〉(全47期)が創刊される。〈文芸〉は、文芸作品以外にも女性、児童、健康関係など、幅広い内容の記事を掲載し、知識人層や抗日聯軍、遊撃隊に多くの読者を持っていたと言う。

一方で当局の圧力は日増しに強まり、1934年2月26日、哈爾濱の共青团及び工会組織が破壊され、30余名が逮捕、〈文芸〉創刊と時期を同じくして共青团満洲省委書記劉明佛(胡斌)と宣伝部長楊波が逮捕後に転向し、各地で組織の破壊と逮捕が行われた。舒群、蕭軍、蕭紅等が相継いで東北を脱出したのがこの頃である¹³⁾。身の危険を感じた羅烽は家を整理し、写真や手紙などを処分した。またいつでも逃げられるよう、常に数十元を携帯し、白朗には万が一のことがあっても機密は漏らすなど厳命したと言う¹⁴⁾。そして蕭軍、蕭紅が脱出した直後、果たして羅烽は逮捕される。

6月18日の朝、羅烽の職場へ、日本領事館の便衣警察が踏み込んで来た¹⁵⁾。かつて羅烽と共に入党した徐乃健が彼の名前を漏らしたのだと言う。羅烽は隙を見て、同僚の事務員を通じて〈国際協報〉社にいる白朗に自身の逮捕を報せる。羅烽の逮捕後の状況に関しては金玉良「羅烽、白朗蒙難記」、白朗「獄中記」¹⁶⁾に詳しい。釈放は翌年の4月22日、その後羅烽と白朗は東北を脱出し、蕭軍、蕭紅らを頼って上海に向かう。上海到着は7月15日であった。

二

白朗の哈爾濱時代の作品で、わかっているものは以下の通りである。

只是一条路(短編小説)	※1933年7月7日の日付がある
反逆的兒子(短編小説)	〈大同報・夜哨〉1933年10月1日～11月27日 ※1933年10月の日付がある
慄慄的光圈(小説)	〈国際協報・文芸〉1934年3月8日(中) ※第三章と四章のみ(四章の最後の部分は欠損)
琴音(雑文)	〈国際協報・国際公園〉1934年3月14日
四年間(中編小説)	〈国際協報・文芸〉1934年5月17日～? ※1934年6月の日付がある
逃亡日記(小説)	〈国際協報・文芸〉1934年9月13日～?
照例的幾句[開場白]	〈国際協報・国際公園〉1935年3月23日 ※1935年3月21日の日付がある

上記のうち、「只是一条路」、「反逆的兒子」、「四年間」は『白朗文集』に収録されており、全文を読むことができるが、そのほかのものは現存する〈国際協報〉に欠号が多く、一部しか読むことができない。また〈大同報・夜哨〉については現物を見るに至っていないため、「反逆的兒子」以外の作品が掲載されているのかどうかの確認はできていない。

このように資料は限られているが、これらの作品、及び作品の断片から、白朗の初期の創作傾向を推し量ることは不可能ではあるまい。

三

現在わかっている中で最も早期の「只是一条路」は、2000字ほどの短い作品である。主人公は王家棟という、十四歳になろうとする孤児。彼はたまたま音楽家の「兄さん」に拾われたが、ある雪の舞う日、「兄さん」は家棟を呼び、学校をやめて奉公に出るようにと命ずる。上の学校に行って勉強を続けたいと思っていた家棟は落胆するが、承諾するよりほかになかった。家棟はある会社の人事課で、走り使いをすることになる。人事課には課長のほかに二人の事務員がいた。家棟はそのうちの一人、兪嘉生と親しくなり、折に触れて勉強を教えてもらうようになる。「学校にも未練はなかった。嬉しい時に彼が言うように、“学校ではこれまでこんな理屈の通ったことを習わなかった”からだ」。

しかしもう一人の事務員董志明は、兪とは違っていた。ある日仕事が終わると、董は家棟に対し居丈高に、「お屋敷に行って奥様のために食事を用意しろ」と命じる。断る家棟に董はびんたや足蹴りを浴びせ、結局家棟はそのまま会社を辞めて家に帰ってくる。「それは彼自身のまさに最初の闘争の凱旋の帰途であった」。だが「兄さん」は彼を歓迎しない。

「家棟、お前のバカさ加減にはうんざりだ。今度は自分で何とかするんだな」

家棟の返事を待たず、背の高い姉さんがたたみかけるように言った。

「自分で考えてごらんよ。本当にものを知らない子だこと」

「僕は自分が一番孤独な人間だということがわかっています。両親もいないし、兄弟もない。幸いにもあなた方に養ってもらえたことを、本当に感謝しています。今は、確かに自分で何とかしてはなりません、あなたたちの人生の重荷にならないように」

「ごちゃごちゃ言ってないで、行くなら行ってしまえ」

やがて兪嘉生に家棟からの手紙が届く。

嘉生××

僕は行きます。どこへ行くか、何しに行くか、恐らくあなたにはわかっているでしょうね。今後あなたにまた会えるかどうかはわかりません。でも僕は辛くはありません。愉快的気持ちと光が僕を包んでいるからです。

前方に道は一つ——環境との戦い——だけです。僕はこの道を突き進んで行きます。命が終わるその日まで。

ああ！今僕は一羽の小鳥のようです、いえ、一匹の獣です。

あなたが僕に貸してくださった本ですが、愛読したものを選んで何冊かは持って行きます。あなたが贈って下さったものとして。そのほかの七冊は、家に置いてあります。それから僕の写真を一枚、本に挟んでおきますから時間のある時に取りに来て下さいませんか。大丈夫です、皆あなたのことは知っていますから。

では、さようなら。あなたの努力をお祈りして。

あなたの弟家棟より

逆らって家を出た家棟が残した本を、「兄さん」たちが果たしてそのまま保管してくれるのだろうか。その疑問は置いて、家棟が愈から学んだことが、一人の人間として生きること、精神の自由を獲得することの重要性であったことは確かだ。それを実現するために、家棟はまず、恩ある「兄さん」や「姉さん」から自身を解放しなければならない。なぜなら「兄さん」たちは、家棟の精神の自由を認めない、旧い社会に生きる人間だからだ。

「反逆的兒子」は、凍り付くような寒さの中で物乞いをして歩く老人と、その孫の七、八歳の女の子、そして老人の懷に抱かれる二歳にもならない男の子の姿から物語が始まる。彼らが身にまとっているものは、すでに服の形状を為していない。しかも男の子は丸裸で、空腹のため、意識も遠のいているかのようだ。しかし物語の主人公は彼らではない。彼らが一縷の望みを抱いてたどりついたのは、偶然にも彼らが住んでいた K 村の地主が町に構えた屋敷だった。そこで彼らは、以前から彼らに同情的だった地主の息子、柏年に巡り会い、ようやく空腹を満たすことができるのである。老人は柏年に、物乞いをするようになった経緯を話す。彼によれば、子供たちの母親が地主の友人の服を頼まれ、縫い上げて持って行ったところ、強姦され、そのまま屋敷に閉じこめられてしまった。老人の息子が女房を返してもらおうと屋敷に乗り込むが、逆に鍬で殴り殺されてしまう。老人は役所に訴えるが、聞き届けてもらえない。もともと安い賃金で働かされていたため、貯えもなく、K 村では食べていくことができなくなって、やむなく物乞いをしながら町に流れてきたのだと言う。

柏年が老人に食事とわずかな持ち金を恵んだことは、家のコックから父親に告げ口され、柏年は父親から殴られた末に、軟禁される。しかし彼は父親の妾の銀娜と一緒に屋敷を抜け出す。銀娜は多少文字の読める農村の娘で、持参金に目のくらんだ父親によって、ある地主の息子の妻にさせられた。しかし享樂を尽くしたためにその家は没落し、彼女は妓楼に売られてしまう。辛酸をなめた末、柏年の父親に身請けされたのだった。初めこそ待遇は良かったものの、次第に柏年の父親との関係は冷え、孤独の中で彼女は柏年の貸してくれる本を読み、意識を高めていったのだ。

妾を息子に取られたことを知って怒る父親の元に柏年からの手紙が届くが、そこには物乞いに身を落とした老人たちへの苛酷な仕打ちに対する告発が記されると共に、父親との絶縁が宣言されていた。

いずれにしても、あなたに対し、家庭に対し、特にこの悪に満ちた社会に対し、僕はすっかり見極めていきますし、完全に絶望してもいます。僕たちは今すべてを捨てようとしています。あなたが大切だと思うものを、僕たちは全部蔑視しています。あなたが従うもののすべてに僕たちは反抗します。あなたが守ろうとすることのすべてを、僕たちは破壊します。あなたのような人々が為すことのすべてを、僕たちは徹底的に破壊し尽くし、この世に僅かも残すことがないようにします。

お父さん、僕にはよくわかっています。あなたはこの手紙を読んできっと怒り心頭に発するでしょうね。でも僕はどうしても我慢ができません。僕とあなたは親子の関係ですから、包み隠さずお話ししたのです。どうぞお許し下さい。

さようなら、永遠のお別れです。

僕たちの目からは血のような光が溢れています。

僕たちは険しく遠い道に向かって行きます、光り輝く平坦な道を歩いて行きます。
あなたの息子柏年の絶縁の書。

ここで言う「僕たち」は、柏年と、彼と共に家を出た銀娜を指しているのだろう。「只是一条路」と同様、最後を締めくくる手紙の言葉は、前作に比べてより挑戦的であり、柏年らの目指す道がより明確に指し示されている。銀娜の人物像が明確でなく、この物語の中での彼女の役割と存在の必然性が見えてこないことは残念だが、白朗がここで初めて、自身の精神の自由のために、自らの意志で男性と行動を共にし、出て行く女性を登場させたことは注目に値する。

四

「反逆的兒子」からおよそ半年後に書かれた「四年間」の主人公は黛珈という女性である。彼女が矢野という男と結婚し、四年の間に三人の子供を産むが、三人とも生まれて間もないうちに死んでしまうという物語は、読む者の心を重くする。

この作品でまず注目されるのは、二人の結婚が、周囲の反対を押し切り、周囲を説得して実現したものだと言うことである。黛珈は祖父が掌中の玉のように可愛がっていた娘であった。その祖父は矢野の家に財産がないことを理由に、この結婚に猛反対していた。婚約が成立して以後も、「18世紀の頭を持った家長のために」二年間も互いに会うことを許されなかったのである。「矢野」という名前は変わっているが、彼はれっきとした中国人である。

確かに黛珈は無垢な娘だった。生まれながらにして純潔な心を持ち、軽薄な行動を取ったことは一度もない。道を歩くにしても下を向き、口を結んだまま、誰か知り合いが向こうからやって来ても、その人が声をかけなければ気がつかない。通行人にぶつかってしまうこともあるくらいだ。こう言ったことは新しい時代の人々の目には若い娘であればこそその恥じらいのしぐさと映るだろうが、旧礼教の薫陶のもとにあった彼女にとっては少しもわざとらしい所はなく、極めて自然だった。学校では、自由奔放な友人たちが周りで、遠慮のかけらもなくきゃあきゃあと笑い転げながら、不良青年や男子学生を話題にしている時、彼女は怒りを抑えることができなかった。彼女は友人たちの浮ついた様子を軽蔑し、とても卑しいことだと思っていた。彼女はいつもそう言った人々から遠い所に身を置き、一人孤独に行動していたし、彼女たちより少し遅れて下校したりしていた。彼女はしばしばそう言った狂った蝶のような友人たちから身を隠した。彼女たちに自分の崇高な人格を、稀に見る称賛すべき無垢な魂を汚されることを恐れたのだ。

彼女は全精力をテキストに傾けた。彼女は懸命に、努めて、努めて一人の人間になろうとしていた。一人の女性の優れた模範になろうとしていた。

ここに描かれた黛珈の姿は、祖父の厳しい薫陶の下に育った白朗自身の姿を映しているのだろうか。そのような黛珈が、どのようにして祖父の意に叶わない矢野と知り合い、互いに惹かれ合った末に心を打ち明け合い、結婚を約束することになったのか、その経緯は書かれていない。恐らく白

朗には、これからの新しい時代、結婚の相手は男女双方の自由な意志で決めるべきだという考えがあったが、自身は母親の希望のままに羅烽と結婚したのであり、軽佻浮薄に流されることなく将来の伴侶を見定めるために、どのような可能性や方策があるかと言うことに対して、想像が及ばなかったに違いない。

矢野との婚約を勝ち取った黛珈の唯一の心配は、勉強を続けられなくなることだった。だから結婚までに四年間の猶予を願ったが、矢野の家では結婚後も通学することを認めるといふ。黛珈はその約束を信じて、三千里離れたL省から哈爾濱へ嫁いできたのだ。だが結婚してみると、彼女の勉強を続けたいという希望は矢野の母親の強硬な反対に遭う。

「女はいくつか字が読めればそれでいいんだ！卒業するかどうかなんてどうでもいいことだよ。まして嫁に来たんだ。嫁は家のことをするのが務めだ、勉強する時間なんてあるはずないじゃないか。私だって勉強なんかしたことはないけれどここまで来たんだ……」

妻と母親の間に立って右往左往する矢野の姿を見て、矢野に親不孝の汚名を着せるに忍びなく、一旦は勉学を断念した黛珈だったが、里帰りをきっかけに再び母校に通い始める。彼女の祖父が費用を負担することを条件に矢野の家も渋々通学を認めたその矢先、黛珈の妊娠がわかる。婚家に戻った黛珈は墮胎を希望するが、矢野がそれを認めるはずもなく、出産の日を迎えることになる。

妊娠がわかって以後の記述は非常にあっさりとしており、母となる喜びとか、日々大きくなる腹の中の我が子に対する愛情、希望といったものは全く書かれていない。

それからというもの、黛珈の健康な体は日一日と弱っていき、気持ちも次第に沈んでいった。以前のはつらつとした姿はすべてどこかへ消え去ってしまい、笑顔になることもほとんど無くなってしまった。十九歳の黛珈はすっかり陰鬱になり、黙り込んでしまった。どんな心配事があるのだろうか。それとも過ぎ去ってしまった青春の日々を追悼しているのだろうか。

妊娠中の黛珈に関する記述は上記の部分だけである。

木々が葉を落とし、雪が舞い始める頃、黛珈は最初の子を産み落とす。が、妊娠中の淡々とした記述に対し、出産の場面はいくらか詳しい。産婆を呼びに走る矢野、傍らで彼女を励ます母親と義母、苦しみのあまり罵りのことばを叫ぼうとするものの声にならない黛珈、そして部屋の外で妻を案じ、墮胎を認めなかったことを悔い、彼女の苦しみを僅かも引き受けられない自分に苛立つ矢野。夜明けも間近になった頃、ようやく女の子が生まれる。

出産後の黛珈は世の母親と同じようにかいがいしく子供の世話をする。「なぜ女は子供を産むのに、男はそうでないのだろう」と思いながらも。跡取りにならないことから、生まれた女の子は矢野の家では歓迎されなかったが、矢野と黛珈は初めての娘を慈しんだ。黛珈は矢野に娘に対する将来の希望を語る。

「きっとこの子にちゃんと教育を受けさせましょうね。この子を偉大な女性に育てるわ。四歳になったら幼稚園に入れて、もう少し大きくなったらほかの子が知らないようなことを教えましょう。私たちが知っていることすべてを。そしてもし経済的に許されるなら、たくさんの本

を読ませて、たくさんの新しい知識が得られるようにしたいわ。この子を典型的な女性にしたい。勇敢で、たくましい、生命力に満ちた女性にしたい。この世界に一筋の光を与えられるような、私たちの理想の中の女性に育てたい……」

だが一ヶ月を過ぎた頃から子供は乳を飲まなくなり、日々衰弱していく。そして生まれて三十七日目について死んでしまうのである。その亡骸は、黛珈の哀願や抗議にもかかわらず、次の子の懐妊と出産に障るからという理由で墓に埋めることを許されず、犬に食わせるために、裸にされ、むしろに包まれて道端に置き去りにされるのだ。

出産を手伝いに来ていた実母の帰郷、祖父の死など、黛珈にとっていくつかの心の塞ぐ出来事が続いた後、彼女は二人目の女の子を懐妊、出産するが、この子もまた第一子と同様の病にかかっている。子供に見込みのないことを知った矢野は、彼女の哀しみを慰めるために、出産のために教職を辞す知人の妻の代わりに勤めてみないかと持ちかける。

「それじゃあ早く死んでしまえばいいわ。子供を抱えての生活はうんざり」

彼女は気も狂わんばかりに喜んだ。この時彼女は、子供が早く死んで、自分の第二の希望が叶えられることだけを願っていた。だがそれは彼女が残酷なのでもなく、子供を愛していないのでもなかった。希望が子供よりもずっと大切だということなのだった。

果たして子供は間もなく息を引き取り、最初の子と同じように墓に入れられることなく、道端に捨てられる。跡取りにならない女の子ではあっても、一年間に二人の孫を失ったことで悲嘆にくれる義母とは対照的に、娘の亡骸を前にしても、黛珈は泰然とし、口元には笑みさえ浮かべている。そしてその後、家族の反対を押し切り、黛珈は教員として勤めることになるのだが、学校は彼女の理想とは大きくかけ離れていた。女性教員たちはいずれも美しく着飾り、化粧を施していた。その中で、質素な身なりで口紅も引かず、しかも中学校を卒業していない、仕事の経験もない黛珈は、明らかに異質な存在だった。

第十五クラスを任された彼女は「24」を「204」と書き間違えるような生徒たちを熱心に指導し、わずか十数日でかなりの教育的成果を上げたが、体の方は悲鳴を上げていた。教員室は彼女にとっては墓場のようなだし、唯一の知り合いである学生時代の同級生は生徒指導で忙しく、話もできない。そこへ以前教員として勤めていた女性の復職の話が持ち上がる。職を失わないためには校長に贈り物をしなければならぬと言うことを知った黛珈は、辞職を決意する。

深い絶望の中で、黛珈は三度身ごもり、1933年3月中旬に三人目の女の子を出産する。しかし不幸なことに産気づいたのは夜明け方のことで、取り上げてくれる医者も産婆も見つからず、子供はたちまち危険な状態に陥り、生後わずか一週間のうちに二度も病に冒されるのである。その後小児科の名医のおかげで一命を取り留めたかに見えた娘のために、黛珈は再度夢を託しつつ四季の服を縫うが、子供はやはり生き延びることができない。子供の死に慣れてしまった黛珈だったが、友人の「子供は早く死んで良かったのよ、もし遊んだりしゃべったりするようになってからだともっと哀しいわよ……」という善意の慰めにだけ涙を見せるのだ。白朗はこの物語を以下のような言葉で締めくくる。

しかし、四年間の輝かしい青春の日々は、こうして虚しく過ぎていった。それを彼女は追悼せずにはいられなかった。

ここで言う「四年間」は、黛珈が矢野と結婚し、三人の娘を授かり、そして失った年月であると同時に、黛珈が勉強を続けるために結婚を待って欲しいと懇願した年月とも重なっている。それにしても、白朗がこの物語で三度子供を殺した理由は何なのだろうか。また三回目の出産にだけ年月を明記していることに、何か意味はあるのだろうか。

出産に関わる作品としては、蕭紅に「棄児」（1933年4月18日）がある。自身の出産をモチーフにしたと思われるこの作品は、蕭紅のデビュー作として、「四年間」が発表されるほぼ一年前に〈大同報・大同倶楽部〉に連載されている¹⁷⁾。自身の産んだ子供への強い愛情を断ち切って、伴侶（蓓力）と共に歩み出す女性（芹）の物語を、蕭紅はこのように結んでいる。

産婦たちは皆子供を抱き、車や馬車に乗って一人一人退院して行った。今も退院して行く。彼女には子供も、車もなかった。ただ目の前の一本の大通りを歩いて行くしかなかった。荒れ果てた畑に出撃して行くように。

蓓力があたかも助手のように先導して行く。

彼らの二つの影が、一組の頑強な影が、また人の林の中へと突き進んで行くのだ。

蕭紅の描く芹が自らの意志で子供を棄て、伴侶と共に戦いの決意を固めるのに対し、白朗の描く黛珈は、結婚に関しては自分の意志を貫いたものの、それ以外の出来事には翻弄されるがまま、物語の最後にも、彼女の希望を見出すことはできない。白朗は当然、「棄児」は読んでいたであろう。なぜ白朗は、蕭紅が芹にしたように、黛珈に希望と戦いの力を与えなかったのだろうか。陳震文によれば、羅烽に協力して、自宅で宣伝のビラなどを印刷していた時、白朗は妊娠していたというが、その子が生まれたという事実は確認できない。そこにどのような事件があったのかはわからないが、そのことと「四年間」はつながりがあるのだろうか。

五

「只是一条路」と「反逆的兒子」で、旧きものに背を向け、これまでのしがらみを捨てて未来に果敢に挑戦していく青年を描いた白朗が、なぜ黛珈に希望と未来と闘争の力を与えなかったのか。少ない手がかりの中で、「反逆的兒子」と「四年間」の間に〈国際協報・国際公園〉（1934年3月14日）に発表された「琴音」が、一つのヒントを与えてくれるように思う。

「琴音」は、「某紙」に掲載された「為辰」と署名のある「写写想想、想想写写」と題された文章に対する激しい抗議の文である。「写写想想、想想写写」の原文を読むことはできないが、「琴音」に一部が引用されており、そのおおよその内容を知ることができる。引用部分は以下の通りである。

「我々」の文学の流れ

文芸においてなお幼稚な満洲国でも、人の魂を動かすような文芸刊行物が当然のことながら

生まれている。哈爾濱は比較的歴史があり、まだ幾らかましな存在であると言えるが、それでも莉花の園と老斐の田しかない。莉花の園には枯れたり咲いたりしている小さな花があるが、大胆に言うなら、それらが我々の文学の流れを代表することは難しい。それは大福帳のような漫談と日記でしかないからだ。老斐の田に至っては言うに及ばずだ。

白朗が〈国際協報〉社に入社したのが1933年の4月、1933年10月に〈国際協報〉の編集を引き継ぎ〈国際公園〉の担当者となったことは既に述べた。上記の文で言う「莉花の園」が、当時「劉莉」のペンネームで活動していた白朗を指していることは明らかである。そして上記の文のいう「老斐の田」は、恐らく1932年頃、〈国際協報〉の編集者として〈国際公園〉に「老斐語」と題して論陣を張っていた裴馨園¹⁸⁾を指すものであろう。とするなら「写写想想、想想写写」は、〈国際公園〉に突きつけられた一つの挑戦状と言うべきものである。この挑戦文に対し、白朗は劉莉の筆名で次のように反駁している。

「我々」とはどのような集団を指しているのか。教えて頂きたい。もし「我々」の立場、観念を閣下が代表しておられるのなら、言うまでもなく、枯れたり咲いたりしている小さな花は、百の中の一つたりともあなたのような、自称「xx学者」を代表するようなことは断じてない。なぜなら、そこには鉄も、血も、生臭さもなく、また棍棒鉄尺もなく、僅かに「枯れたり咲いたり」している赤い花や緑の草と美しい人の姿があり、かくの如く可憐であるからこそ受け入れられているのだから。敢えて一つの文学の流れを代表しようと思う者がいるはずもない。取り越し苦労にもほどがあると言うものだ。

漫談や日記は文芸ではないと言うのか。どうか教えて頂きたい。確かに私もそういった大福帳のようなものには嫌気がさすこともある。だが一時的に大量の正規商品を送ってくる人がいなくなるのは残念なことである。閣下にもし新式の簿記のような詩や小説がおありならば、お送り頂くのにやぶさかではありません。歓迎致します。しかし掲載させて頂くかどうかにつきましては、本園丁がこの眼でじっくりと見定めた後に決定させて頂きませんが、お知らせは必要でしょうか。

「四年間」はこの反駁を書いた二ヶ月後、〈国際協報・文芸〉で連載が開始されている。完成が何年の号であるかは確認できないが、『白朗文集』収録の文の末尾に「1934年6月」の日付があるのは既に述べた通りである。

だが黛伽を絶望のまま、結婚生活の四年間を無為であったと思わせたまま、この物語を終えることは、「写写想想、想想写写」の挑戦に応えることにはなるまい。ここで白朗が作中で黛伽に言わせた言葉を再度思い出したい。

「……この子を偉大な女性に育てるわ。……この子を典型的な女性にしたい。勇敢で、たくましい、生命力に満ちた女性にしたい。この世界に一筋の光を与えられるような、私たちの理想の中の女性に育てたい……」

これこそ白朗が求め、自らも目指した女性像であったに違いない。しかし羅烽を助ける中で闘争

の厳しい現実を知る白朗には、作中ではあっても現実を超えたその先を描くことは容易ではなかった。そのため彼女はまず女性の現実を描き、その上で、そこから女性の未来のあるべき姿を模索しようとしたと言えないだろうか。そして女性の現実を描くことが、「写写想想、想想写写」の作者に白朗が逆につきつけた挑戦状であったのではないだろうか。

1934年9月13日から〈国際協報・文芸〉に連載が開始された「逃亡日記」は、「四年間」のステップを経て、次なる飛躍を試みた作品であるように思われる。ただし残念ながらこの作品は、現在三回分（9月13日、9月20日、9月27日掲載）しか読むことができず、結末を知ることができない。

「逃亡日記」は、2月20日の日付の、以下のような文で始まっている。

なぜただただここに逃げて来ようと思ったのだろうか。自分でも答えが見つからない。それならしばらくこうして眠ることにしよう。目が覚めればすっかり夜は明けているだろうから。

これを書いているのは若い女性である。2月20日の夜に革の鞆一つを持ち、四輪の馬車に乗って長い道のりを走り、ある都市の旅館にたどり着いたらしい。翌日、二人の警官が調べに来て、彼女の言うことをそのまま手帖に書き留め、鞆の中味を確認して行く。鞆の中には服と本が入っている。本があることから、この女性が教育を受けた、新しい時代の女性であることが察せられる。そこまでが第一回目で、第二回目は25日の日付から始まる。彼女は夢を見たらしい。一人の男が金をちらつかせて彼女を屈服させようとし、それがうまくいかないと知るや、銃を胸元に突きつける。それを彼女の父親が高い所から見ている。父親は金と娘を交互に見ながら狡猾な笑いを浮かべている。だが彼女はそれらの脅威に屈することなく暗闇の中を逃げて行くのである。3月1日、彼女は南にいる恋人に手紙を書く。どうやら彼女は二年の間様々の辛酸をなめたようで、その経験を一気に手紙にしたためたらしいが、内容は明らかではない。

若い女性が一人で投宿しているのを、周囲は怪しんでいる。部屋の外では足音がするし、売春婦ではないかと疑っているようでもある。11日になって彼女は職を探しに出かけるが、紹介者もない彼女に職を見つけるのは困難である。途方に暮れた彼女は、このような貧困も「日が経てばたぶん、街頭の物乞いのように、慣れてしまいうに違いない」と思いながら、これまで若い独り身の女の物乞いを見たことがないことにも思い至る。「若い独り身の女にも道はあるのではないだろうか。しかし私にはどれが自分の道なのか見つけることができない」。そして三年前のある暑い6月の一日を思い出そうとする所で三回目は終わっている。恐らくこの後、彼女がどうして一人で逃亡することになったのかが語られるのだろう。それを知らぬまま予測することは無謀ではあるが、自身を圧迫する何かから逃げ出し、自身の生きる道を必死で探そうとする若い女性の姿に、四年間を棒に振った黛珈のその後を見ると考えるのは穿ちすぎだろうか。また、金をちらつかせる男と、金と娘を天秤に掛ける父親の姿は、「反逆的兒子」の銀娜の境遇を思わせる。

六

「只是一条路」や「反逆的兒子」に描かれた、旧いしがらみを自ら断ち切って歩き出そうとする若者の姿は、「四年間」を経て「逃亡日記」に引き継がれていく。それも男性から女性へと引き継がれ

ていくように見える。

最初が身寄りのない孤独な少年（「只是一条路」）であるのは、恐らく小説を書いた経験の少ない白朗にとって、しがらみを捨てさせることが比較的容易であったためであろう。柏年（「反逆的兒子」）は、「只是一条路」の家棟よりはやや年かさである。彼は家棟よりは明確に世の中の不条理を知り、憂い、悩んでいる。柏年の家出はお定まりの筋書きではあるが、彼が父親の妾である銀娜を伴ったのはどのような意味があるのだろうか。〈大同報・夜哨〉に八回に亘って連載されたこの作品が、一回毎に書き継がれていったものか、それとも全体を書き上げた上で分割したものかはわからないが、銀娜の出現はかなり唐突である。白朗の意図はどこにあるのだろうか。

白朗の作品を読んでいると、彼女は作品中に登場させた人物を一つのモチーフとして次に繋いでいるように見える。例えば「只是一条路」の俞嘉生は「反逆的兒子」の柏年のモチーフなのではないか。そして柏年が伴った銀娜は、自身の伴侶を自身で決めた黛伽のモチーフになっているのではないか。しかし出て行く銀娜に対し、黛伽は出て行くことができず、四年間の結婚生活で失われた若い時を追悼するばかりである。黛伽を出て行かせることは、既に述べたように、現実の生活と闘争を知る白朗にとって簡単なことではなかった、と同時に旧いしがらみを棄てて出て行くことが、当時の女性にとって如何に困難であったかを物語っている。しかし白朗は諦めなかった。「逃亡日記」で、女性はついに出て行くのである。この作品の全文を見ることのできないのは甚だ残念である。

白朗にとって蕭紅の出現は、大きな影響を与えたに違いない。蕭紅は「棄児」の発表後も精神的に作品を書いている。白朗が「只是一条路」を書くまでに「棄児」のほかにも二篇、「反逆的兒子」を書くまでに十一篇、「四年間」を書くまでに三篇がある。しかし筆者が既にいくつかの小論で述べてきたように、地主の娘として不自由のない生活を送った蕭紅には、生活の実体験が不足していた。従って彼女の初期の作品の中で、女性たちは果敢に立ち上がるものの、なぜ彼女たちがそのような意識を持つに至ったかは描かれていない。当時の蕭紅の描く女性は、観念的な、一つの理想の姿であった。それに対して白朗は、羅烽の仕事を手伝う中で、闘争の現実を理解していったに違いない。地下黨員としての活動を知られた後、羅烽は白朗にいくつかの書物を紹介しているが、その中にゴリキーの「母」がある。そこに描かれた、主人公である「母」、ペラゲーヤ・ニーロヴナが息子に導かれて目覚めていく過程は、「淪陥前後」に描かれた白朗自身が目覚めていく過程と非常によく似ている。また、白朗の後の作品「生與死」（1936年）の、若い女性の囚人たちを助けようとする「おばさん」の姿には、ペラゲーヤ・ニーロヴナの形象に重なるものがある。

それにしても、黛伽の産み落とした子供が一人も育たないという筋書きはなぜ考えられたのだろうか。これより後に、胡風の妻梅枝が、はじめて身ごもった子を活動の邪魔になるからといって墮胎しようとしているが（1934年）¹⁹⁾、当時、一人の自立した人間として抗日の活動に自覚的に関わっていくために、子供は足手まとい以外の何ものでもなかったのだろう。そしてまた彼らには、子供を抱えて活動を続けていくだけの経済的余裕もなかった。ゴリキーの「母」に、次のようなことばがある。

家庭生活は革命家のエネルギーを低下させます、どんな場合でもそうです！子供ができる、生活の保障がない、パンのためにうんと働かなくちゃならない。ところが、革命家はたゆみなく、ますます奥深く、ますます広く自分のエネルギーをのばしていく必要がある。時代がそれを要求している。ぼくらはいつでもみんなの先頭に立って進まなくちゃならない。なぜなら、ぼく

らは働く者たちであり、古い世界を打ちこわして、新しい生活をつくり出すために、歴史の力で招集されているんだから。ところでもし、ぼくらが疲れてへたばったら、小さな成功に迷わされて立ちおくれたら、それはまずいことになる、それは大事業への裏切りと同じことだ！ぼくらが自分の信念をまげないですみ、しかもいっしょに進んでくれる伴侶なんて見つかりっこありませんよ。ぼくらが担うのは小さな成功じゃなくて、ただ完全な勝利だけだということを、一刻も忘れてはいけないのです²⁰⁾。

これは「母」の息子パーヴェルの友人ニコライが、自身の恋愛とその結末について「母」に語る場面である。ゴリキーが「母」を書いた1906年から白朗が文学活動を開始するまでおよそ二十五年の隔りがある。白朗にしても、蕭紅にしても、また梅志にしても、自立した女性として信念を曲げず、同じ志を抱く伴侶と共に進むことを決意したのは、当時において革新的な、勇気ある行為であった。出産、育児の問題は、彼女たちから七十年以上も年月を経た現在でもなお、自立を求める女性たちの前に立ちはだかる大きな課題であり続けることを思う時、彼女たちの勇気と覚悟には、敬服の念を禁じ得ない。授かった子供を取って産まない、或いは育てないという選択を良しとするか否かは、ひとまず置くよりほかにあるまい。それは時代が先駆者としての彼女たちに課した苛酷な選択であったのだから。

しかしながら家を出て行かない黛珈に、作者はなぜ子供を育てさせることを拒んだのか、また、育たなかった子供はなぜすべて女兒だったのか。

それは黛珈に次の行動を起こさせるための布石なのではないだろうか。女性がすべてを棄てて出て行くためには、それ相応の痛みが伴うことを物語ろうとするものではないだろうか。三人の娘が生まれるたびに黛珈は娘たちに希望を託す。教育を受けさせ、立派な強い女性に育てたいと希求する。だがそれは三度叶わないのである。それは、立派な強い女性になるのはまず自分たちでなければならぬという使命感と自負が作者自身にあるからではないだろうか。次の世代を待ってはいは遅い。それを知るために、或いは示すために、黛珈が産んで失うのは女の子でなければならず、しかも産み落とした三人のすべてを失うという激しい痛みでなければならなかった。

最後にこれまで言及しなかった二篇、「慄慄的光圈」と「照例的幾句 [開場白]」に触れておく。

現在見ることのできる「慄慄的光圈」は、三回連載のうちの二回目と思われる。主人公は阿龍嫂という女性で、夫と子供が病気にかかっているのに、自身は仕事場を首になってしまうようだ。「反逆的兒子」と「四年間」を繋ぐ、しかも女性を主人公とした作品として興味深い、全文が読めないのは残念である。

「照例的幾句 [開場白]」は小説でも雑文でもなく、宣言文のような内容である。

文芸を愛する同志たちよ、
一斉に行動しよう！
この荒漠とした荒野を開拓し、
広大な楽園を建設しよう！

このように呼びかけた最後を、「この短いことばを以て、諸君への挨拶としよう！」と結んだこの文は、日付から見て、逮捕されている羅烽の釈放を見越し、東北脱出を同志たちに予告したもので

あるように思える。

少ない作品から、しかも決して完成度が高いとは言えない作品から白朗の文学性を読み解こうとするのには些か無理があるかもしれない。だが白朗の作品を同時代の女性作家蕭紅の作品などと読み比べる中から、当時の先進的な女性たちの果敢な挑戦の姿は確実に見えてくると言え、この後の白朗の活動を追うことで、彼女たちの戦いが現在の社会の礎になっていることを改めて確認したいと考えている。

注

- 1) 本名金承載。満洲族。沈陽の刻字職人の家に生まれ、1913年に哈爾濱に移る。〈晨光報・江辺〉を通じて塞克（1906～88）と知り合い、彼の紹介で上海の新華芸術大学に編入（1929年）、1930年夏に共青団に加入、翌年入党する。（劉樹声、里棟「金劍嘯年譜」：〈東北現代文学史料〉第五輯、1982年8月）
- 2) 全五巻（四冊）。内訳は以下の通り。1: 短編小説集（1984年10月）、2: 中編小説集（1985年9月）、3・4（合巻）: 散文集・報告文学集（1986年4月）、5: 愛的召喚（1983年11月）、いずれも春風文芸出版社。
- 3) 本名張迺瑩。黒龍江省呼蘭県の地主の家に生まれる。旧式の結婚を嫌って家を出るが、結局は親の決めた婚約者と同居。妊娠するが、婚約者は姿を消す。窮地を救った蕭軍と同居し、作品を書くようになるが、抗日戦期、各地を放浪する中で蕭軍と別れ、同じく東北出身の作家、端木蕻良（1912～96）と同居するようになり、香港で病死する。
- 4) 陳震文「白朗の生平和創作道路」（〈東北現代文学史料〉第五輯）では8月2日生まれとするが、張連俊等『東北三省革命文化史』（2003年1月、黒龍江人民出版社）では8月20日とする。このほか、白朗の経歴に関しては、同一資料の中でも矛盾する点が見られる。
- 5) 白瑩「白朗小伝」（〈東北現代文学史料〉第二輯、1980年4月）による。陳震文によれば、1923年、齊齊哈爾第一師範学校に入学し、成績優秀だったため、何度か飛び級を経験し、友人たちの称賛的となったが、それは同じクラスで学んでいた白朗の姉にとっては面白くないことだったと言う。また陳震文によれば、経済的な理由のため、白朗は二年生の時に中途退学を余儀なくされたと言う。
- 6) 里棟、金倫「羅烽伝略」（〈東北現代文学史料〉第二輯）
- 7) 本名馬尚徳。河南省出身。1926年夏、共青団に加入、1927年5月に入党し、1929年春満洲省委に派遣される。1932年6月に組織された磐石の抗日義勇軍を指導し、1940年2月に日本軍に射殺される。（李劍白編『東北抗日救亡人物伝』1991年12月、中華大百科全書出版社）
この頃、楊靖宇は「老張」と呼ばれていた。「老張」が楊靖宇であることを羅烽自身が知ったのは、ずっと後のことであったと言う（羅烽談）。
- 8) 金玉良「羅烽、白朗蒙難記」（〈新文学史料〉2006年四期）
- 9) 学名劉鴻霖。遼寧省義県出身。祖父は小作農だったが、父親は家具職人として生計を立てる。十八歳の時に生活のために吉林省で騎兵となり、1928年、東北陸軍講武堂に入るが、1930年春、教官を侮辱したかどで追放された。（王徳芬「蕭軍簡歴年表」：『蕭軍紀念集』1990年10月、春風文芸出版社）
- 10) 本名李書堂。哈爾濱の労働者の家に生まれる。生活は苦しく、一家は各地を点々とする。阿城の小学校に入学した時には、制服を作る金がなかったために、学校を追われ、その後、いくつかの学校に入退学を繰り返すが、それもすべて貧困のためであった。しかしロシア人の経営する中学に籍を置いたことがあったため、九一八の頃には航務局でロシア語の通訳を務めていた。義勇軍に入ったのはその後のことである。（『東北現代作家伝略』：〈東北現代文学史料〉第二輯）
- 11) 星星劇団、及びそこに集まった人々の行動や関係については平石「星星の火、広野を焼くべし——「星星劇団」の人々と地下党——」（〈大正大学研究論叢〉第十三号、2007年3月30日）を参照されたい。
- 12) 本名方靖遠。遼寧省台安出身。当時は林郎の筆名で活動していた。蕭軍とは古い友人である。1932年4月から哈爾濱で〈東三省商報・原野〉の主編を務め、9月からは裴馨園の後を受けて〈国際協報・国際公園〉の主編となる。この頃は既に黨員であった。彼が満洲省委の命を受けてウラジオストクのレーニン学院に留学したのは1933年10月である。（方未艾「海參崴的中国党校」、陳隄「林郎、三郎與悄吟」：趙傑編『歴史珍憶』2004年4月、遼寧人民出版社）

- 13) 舒群が3月に友人を頼って青島に脱出し、蕭軍と蕭紅を呼び寄せた。蕭軍と蕭紅が大連から青島に向かったのが6月14日である。
- 14) 金玉良「羅烽、白朗蒙難記」。また金は、羅烽から、5月下旬、満洲省委秘書長の馮仲雲が訪ねて来て、自分も哈爾濱を離れる準備をしていることを明かし、ついでには娘を預かってくれないかと依頼したが、自身もどうなるかわからない状況の下では断らざるを得なかった、という話を聞いたと言う。
- 15) この時羅烽は松浦鎮車務段に勤めて五年目、勤務態度が真面目で同僚たちの信頼も篤かったため、車務段分隊長になったばかりだった。当時の車務段顧問は安達という日本人で、羅烽のために当局に陳情してくれたが聞き入れられなかったと言う。(金玉良「羅烽、白朗蒙難記」)
- 16) 「淪陥前後」、「保重」、「混乱」、「無言的会見」、「礼物」、「探望」の六篇から成る。「淪陥前後」のみ、「1935年上海」と日付がある。『白朗文集』3、4合巻所収。
- 17) 連載は1933年5月6日～17日。この作品に関しては平石「“フィクション”と“ノンフィクション”の交差——蕭紅《子捨て》を読む」(『宮澤正順博士古稀記念 東洋——比較文化論集』2004年1月、青史出版)及び平石『蕭紅研究——その生涯と作品世界』2008年2月、汲古書院)を参照されたい。
 実際は、「棄児」の前に1932年7月30日の日付のある「幻覚」という詩があるが、それが発表されたのは「棄児」より後の1934年である。
- 18) 詳しい経歴については不明。裴馨園の妻、黄淑英の回想(「二蕭與裴馨園」:〈東北現代文学史料〉第四輯、1982年3月)から推測すれば、19世紀末の生まれである。中共満洲省委が左翼作家たちの生活を支援するために哈爾濱に開いた明月飯店の出資者の一人であり、蕭軍が作家として世に出ることを支援した。
- 19) 梅志「我第一次生孩子時的幾件事——懷念魯迅先生給予的幫助」(1991年9月3日:『花椒紅了』1995年9月、中国華僑出版社)
- 20) 翻訳は『世界文学大系 49 ゴーリキー』(1960年、筑摩書房)横田瑞穂訳によった。

(大正大学文学部教授)